重監房資料館資料館だより

JYU-KANBO
National Museum

くりう

2022.12 No.21

目次

P1-P2　2022年度企画展
『希望（のぞみ） 絶たれても なお ～重監房収監者の人生～』開催報告
P2-P3　『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』刊行の報告
P3　2022年度ウォーキングツアー実施報告
P4　2022年度　来館者統計
P4　お客様の声（来館者アンケートより抜粋）
P4　お知らせ
P4　ご利用案内・アクセス

2022年度企画展『希望（のぞみ） 絶たれても なお ～重監房収監者の人生～』開催報告

2022年度企画展『希望（のぞみ） 絶たれても なお ～重監房収監者の人生～』は、11月13日をもちまして、無事会期終了となりました。感謝をもってここにご報告させていただきます。

「企画展」とは言え、収監者についてあらたに判明したことを、時系列に並び替えた常設展に溶け込ませるような展示構成であり、地味なものであったと思います。そのような中、「このパネル（常設展）を今まできちんと見ていなかった」と、あらためて黙々とパネルを読み進められる来館者や、「事柄だけではなく、そこには必ず人がいたことを感じることができた」など、感想を伝えてくださる来館者が多くいらっしゃいました。

３回行ったギャラリートークでは、初めてハンセン病を学ぶ中高生から、ハンセン病のことをよくご存知の方まで多数がご参加くださり、途中熱心な質問もあり、30分の予定が15分ほど延長となりました。

会期終了３日前には、オンラインによる展示解説を行いました。平日の午後１時半からの開始でしたが、思いのほか申込があり、「今後もオンライン展示解説をしてほしい」とのお声もいただきました。当館主催で行うオンライン展示解説は、解説をする私（松浦）も初めて、動画編集（総務の香川）も初めてとあり、見苦しい点が多々あったことと思います。皆様からのお声を参考に改善し、再挑戦できたらと思っております。

さて、企画展をご覧になれなかった方々のために、展示の一部をご紹介します。

もともと重監房資料館の常設展では、「重監房設置の経緯」を５枚のパネルで紹介しています（1.〔長島事件〕、2.〔本妙寺事件〕、3.〔洗濯場事件〕、4.〔十七年事件〕、5.〔「特別病室事件」の報道〕）。

企画展ではこれらのパネルを4つの壁に分け、収監者のパネルも事件ごとに分けて設置しました。ここでは、４の「十七年事件」と、その年以降に亡くなった収監者についてご紹介しましょう。

「十七年事件」以降、重監房廃止までの収監者

1942（昭和17）年秋、栗生楽泉園患者有志たちは、「重監房を壊して、事務本館を焼く。警察など外部に実情を訴える」という計画を立てました。患者たちは園から強制労働をさせられるなどの不満も持っていましたが、重監房の収監者への扱いの酷さに、「重監房の存在は許せない」と計画を立てたのでした。しかし、計画は園に漏れ、未遂に終わりました（十七年事件）。

歴史に「もし」というのはありませんが、「もし

十七年事件が決行されていたら」、よくも悪くも、この後の収監者たちの人生は変わっていたでしょう。

◆満□十□さん

収監日数が最長の549日です。1943（昭和18）年3月13日に房から出されましたが、5月11日に満39歳で亡くなりました。罪状は「賭博」ですが、実際は大阪で盗品の自転車を買ったという罪で収監させられ、ハンセン病ではなかった妻も391日間収監させられました。

◆鈴□秀□さん

栗生楽泉園から一時帰省をしていた際、郷里で若い女性が殺されるという事件があり、鈴□さんは殺人嫌疑をかけられ、重監房に収監させられました。1946（昭和21）年1月4日に房内で死去。収監日数439日。満18歳。亡くなったときの体重は15kgほどで、全身凍傷だったそうです。

◆藤□良□さん

1944（昭和19）年1月、栗生楽泉園から逃走して高崎警察署（群馬県）で捉えられ、帰園の途中車の窓ガラスを割って逃げようとしたという罪状で収監させられました。収監回数は3回、収監日数は合計530日以上。1945（昭和20）年1月5日に亡くなりました。

◆水□進さん

1945（昭和20）年9月20日、大阪から栗生楽泉園へ来て入所を願い出ましたが同園からは拒否され、草津町の派出所などで金品を要求して貨車に乗り込んだ罪で、重監房に送られました。同年11月9日に房内で亡くなりました。

重監房運用廃止とその後

1947（昭和22）年8月、栗生楽泉園入所者は園に対して「重監房は人権蹂躙（じゅうりん）である」と廃止を訴え、厚生省は調査の結果、同年９月に重監房の運用を廃止しました。

戦後、特効薬プロミンの出現により、ハンセン病は不治の病ではなくなりましたが、1953（昭和28）年、国は強制隔離の方針を変えないまま「癩予防法」を「らい予防法」と改正、その法は1996（平成８）年まで廃止されませんでした。同じく、1953（昭和28）年、ハンセン病者専用の「熊本刑務所菊池（きくち）医療刑務支所」が建ち、らい予防法が廃止されるまで運用されました。

建物は2019年に解体されましたが、2022（令和４）年５月にリニューアルオープンした国立療養所菊池恵楓園（きくちけいふうえん）歴史資料館（熊本県）では、菊池医療刑務支所について詳しく展示がされています。重監房と菊池医療刑務支所は、なにが違ってなにが同じなのでしょう。またみなさまとご一緒に考える機会がもてたら幸いです。

（松浦　志保）

『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』刊行の報告

去る11月16日は、国立療養所栗生楽泉園の設立90周年にあたる日でした。この日に合わせて『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』を刊行いたしました。『瀬木悦夫復刻シリーズ１　特別病室』の続編にあたりますが、本書は２つのセグメントから成り、第一部は瀬木悦夫の小説「われとわが身を」を活字化し、第二部は昨年度の企画展『重監房を報道した男～関喜平展』で実施したトークイベントを収録したボリュームがあるものに仕上りました。

以前くりうNo.18にて紹介しておりますが、小説「われとわが身を」は、同人誌『本格的小説』に掲載された作品です。ガリ版で作られているので、手書きであるがゆえの不揃いの文字からは力強く書かれている箇所や筆が走っているといった書き手の温度が伝わってきます。同人誌全体で複数の筆跡がある中、「われとわが身を」は喜平自身が書いたとみなしました。ガリ版ならではの書き手の温度感をどうやったら再現できるだろうと試行錯誤の結果、あえて旧漢字や異体字を用いて活字にしました。読み物としては読みづらい部分もあるかもしれませんが、喜平特有の、漢字の意味で単語を作っている語彙を愉しんでいただけたら幸いです。

「われとわが身を」の内容は、是非皆さまにも読んでいただきたいのでここで詳しく触れませんが、なかなかに刺激的です。17歳でハンセン病と診断をされた主人公千里雄の人生が描かれています。私自身の感想ですが、この作品を資料として最初にみた時に感じた衝撃は言葉で言い表せないもので、しばらくの間、思考が止まっていました。驚いたことは多々あるですが、そのひとつは草津町にあったハンセン病患者の集落「湯之澤」を、小説の中で「湯の原」として描いていることです。千里雄の父親や母親（両親はハンセン病患者ではない）を通して描写される「湯の原」は、喜平が見て感じた「湯之澤」であり、小説でありますが、実にリアリティに溢れています。現在、湯之澤の跡地を訪れても新しい街並みやホテルへと変貌を遂げており、過去の形跡を感じられるものはほとんどありません。消されてしまった集落という印象でした。しかし、「われとわが身を」を読めば、各地からハンセン病患者が集まる活気ある集落を想像できます。また、小説の中では、湯之澤の存続運動についても少しだけ触れられています。

1932（昭和７）年に国立療養所栗生楽泉園が開園すると、園は長い期間をかけて入所を促しました。当初は穏健に移転を解決しようという姿勢でした。しかし、厚生省は1940（昭和15）年12月には湯之澤の取り潰しの方針を固めると〈1〉、解散への流れが急速に進みます。翌年３月に開かれた交渉委員会で県が提示した内容は２ヶ月～１年の期限で立ち退きを迫るものでした。このような経緯で1941（昭和16）年５月18日に湯之澤部落解散式がおこなわれました。翌年５月に移転完了とされ〈2〉、小学校など一部の建物は楽泉園内に移築されたものの、湯之澤集落は取り壊されました。

湯之澤集落にハンセン病患者が住むようになって135年、栗生楽泉園の創立から90年、重監房こと特別病室の撤廃から75年、らい予防法廃止から26年、重監房資料館の開館から８年…そんな年月を感じながら、『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』を手に取っていただければと思っております。

来年は、瀬木悦夫こと関喜平が亡くなって40年です。当館は引き続き、関喜平に関する調査を続けていきますので、その成果を報告できるように精進してまいります。

『瀬木悦夫復刻シリーズ２　われとわが身を』は、『瀬木悦夫復刻シリーズ１　特別病室』と同様に、当館にて配布しております。遠方の方には、送料をお客様負担でお送りしております。ご興味がございましたら当館までご連絡ください。

（鎌田　麻希）

〈1〉栗生楽泉園自治会編『風雪の紋―栗生楽泉園患者50年史―』（1982年９月）94頁

〈2〉同上『風雪の紋―栗生楽泉園患者50年史―』101頁

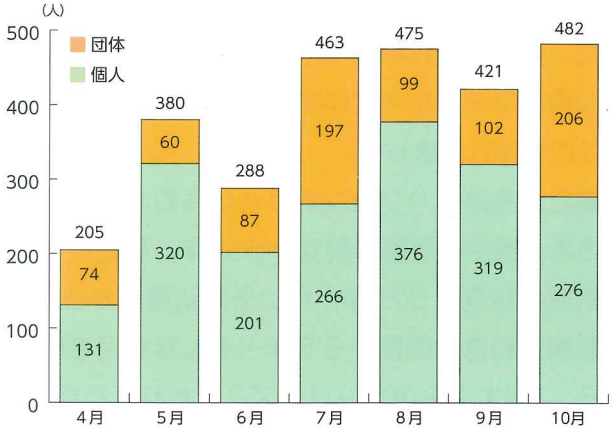
2022年度ウォーキングツアー実施報告

ボランティアガイドの案内による草津町中心から重監房資料館までのハンセン病の歴史ゆかりの史跡や施設等を徒歩で巡るウォーキングツアー「初めてのハンセン病史―もう一つの草津温泉―」は、本年度で５回目の開催となりました。７月23日、30日、８月６日、９月17日の４回開催され、26名の方々にご参加頂きました。今年も天候不順により２回中止となったものの、問い合わせは多く、報道関係者の同行取材も入りました。当企画が重監房に関する貴重な普及啓発の場としてゆき渡ればと思っております。

（香川　進司）

2022年度来館者統計

10月31日現在



2022年度入館者数

延べ	2,714人
1日平均	14.9人
開館以来延べ	46,314人

ホームページアクセス数

2022年度	23,620回
開館以来延べ	390,380回

お知らせ

■新型コロナウィルス感染拡大防止のための来館者の皆様へのお願いと、冬期予約期間について

既にホームページ等でもお知らせしておりますが、引き続き、重監房資料館では新型ウィルス感染防止のために、館内の見学者を常時50人までに制限させて頂いております。また、例年通り、11/15（火）から4/25（火）まで冬期予約期間となり、ご来館は要予約に、開館時間も10：00～15：30（最終入館15：00）とさせて頂きます。ご不明の点は、重監房資料館までお問合せください。

お客様の声（来館者アンケートより抜粋）

◎私は聴覚障害者であり、差別など体験者であり、しかし、特別病室はひどくてあんまりだと思いました。今は特別病室はなくとも、フェイスブックやメール、SNSなどの誹謗・中傷などなり、時代は変わっても同じだと感じました。

（群馬県、56歳・男、会社員）

◎今でも偏見や差別に苦しんでいる人達がいる現実を受け止めなければいけないと思いました。福祉職として確かな知識を身につけ、差別のない世の中になるよう、少しでも貢献できればと思います。

（群馬県、41歳・女、スクールソーシャルワーカー）

◎来てみたいとずっと思っていたが、なかなか来ることができず、やっと見学することができました。ここで暮らすことになった人のお話をもっと聞きたいです。なぜ平成になるまであのような法律が続いたのか、自分でも勉強していきます。

（新潟県、女）

◎世界中に差別という悲しい心があり残念です。現在の社会でも「いじめ」という問題が根深く何故なくならないのか？と感じます。現業で精神・知的障碍者支援を携わっていますが、差別に苦しむ方々が大勢いて困っています。国が教育としてそれらを解決する施策を実施することが、一歩と考えます。皆々様の健康を心よりお祈り申し上げます。有難うご座居ました。

（栃木県、63歳・女、障碍者支援員）

◎語り継ぐ必要があると思います。ひどい、人間として扱っていないことに…。

（石川県、72歳・女、事務員）

ご利用案内・アクセス

■開館時間■ 4/26-11/14（フルオープン期間）：9:30～16:00
11/15-4/25（冬期予約期間）：10:00～15:30　（団体、個人とも完全予約制）

■休 館 日■ 毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、国民の祝日の翌日・年末年始・館内整理日

■入 館 料■ 無料

■交通案内■ 鉄道・バス利用の場合　JR吾妻線長野原草津口駅より草津温泉行バス約25分
草津温泉バスターミナル下車　タクシー約7分、徒歩約45分
車利用の場合　渋川伊香保ICより約2時間10分　上田菅平ICより約1時間50分
（草津方面からお越しの場合は楽泉園の正門を入らず、その先200mの未舗装路をお入りください。）

重監房資料館「くりう」第21号【季刊】
発行日：2022（令和4）年12月1日／企画・編集・発行　重監房資料館／URL：https://www.nhdm.jp/sjpm/
〒377-1711　群馬県吾妻郡草津町草津白根464-1533　TEL：0279-88-1550　FAX：0279-88-1553